

舞踊作品の分析的研究

—創作過程の分析—

磯 島 紘 子

1. 目 的

創作ダンスの指導をより効果的に行なうためには、対象の能力や発達段階に即した指導法を確立することが必要である。対象のレディネスに合った指導法を探索し、文部省学習指導要領に照らしながら、具体的な指導内容を体系化するのが究極の目的である。そのためには、創作ダンスの要因を明確にし、その上で、創作活動の実際を分析し、作品の価値につながる創作過程の特性を把握しなければならない。そこで、第20回～第22回日本体育学会発表結果より得た、舞踊創作における要因を基とし、文部省学習指導要領をふまえながら、指導計画を立案し実験を行ない、教授・学習過程における各要因の変容、固定の様相を考察するものである。

2. 方 法

(1) 期間および対象

期間 昭和47年3月～4月

対象 岡山市鹿田保育園3才児男子3名、女子3名
岡山市南方幼稚園5才児男子3名、女子3名
岡山大学附属小学校2年生男子3名、女子3名
同5年生男子3名、女子3名
岡山市御南中学校2年生ダンス部員3名
真備学園高等学校2年生ダンス部員3名
本学体育科2年生ダンス部員3名

(2) 実 験 方 法

- (イ) テーマ決定については、文部省学習指導要領および年令別リズム反応テスト結果（第19回日本体育学会において西谷怜子発表資料）より3才～小学校5年までの自由表現において、頻数の多い「ちょう」を同一テーマとした。
- (ロ) 指導の方法は、3才～小学校5年までは、現場における教科担当教師による一斉指導であり、中学校～大学までは自由創作を行なわせ、一定期間において作品の修正を行なわせた個別指導である。
- (ハ) 創作過程における指導、助言は各年令とも、すべての要因（テーマ、イメージ、内容、動き、リズム、空間、フレーズ、作品の長さ、伴奏音楽）について行なった。
- (ニ) 作品の評価は実験者4名により行なった。
- (ホ) 創作過程および作品を V.T.R に収録し、記録分析した。
- (ヘ) 教師の発言は「授業の科学—授業分析の方法」を参考に類別した。

3. 結 果 と 考 察

〔1〕 教授・学習過程における要因の変容について
教授・学習のパターンは図1に示す。

児（P）の応答という形で教授・学習を進め、教師対幼児が交互にくり返されている。動きについてのTの発問に対してはPは有効な応答をし動きも変化させている。リズム（速度）、空間（高低）についての発問に対しては、テーマと無関係な応答が返り、さらにリズム、空間の説明（提示）に対し、リズムはスキップ→ゆっくりウォーク、走ってまわるなどと動きそのものを変化させている。テーマのとらえ方についての発問に対しても全く無関係な応答が返り、幼児自身の発想は非常に狭く、とぶ、とまるといった単純なとらえ方に限られている。最後の処理（反復）に対しては、前のTの発問、説明により、やや変化のみられた動きが生かされず、終始スキップでぐるぐるまわる動きしか出現しない。

5才では、教授・学習のパターンは3才と同様であり、Tの発問に対してPの応答が交互にくり返され、活発で有効な応答が返っている。テーマのとらえ方は3才に比べ、やや広がりが見られ、花のまわりをとぶ、羽を下に下ろしてとまるなどと、テーマを具体的にとらえている。動きについての発問、説明（提示）に対して、腕上下で走る→走っては腕を後に下ろしてしゃがむなどと2種類の動きを組み合わせている。リズム（速度）、空間（高低）についての発問に対しては無関係な応答が返り、次にリズムについての説明（提示）に対し、とまって腕をゆっくり上下させる、速く走るなどと速度の変化がみられる。空間についての説明（提示）には全く無関心でぐるぐるまわるのみである。

小学校2年では、Tは過程Ⅰにおいて、テーマ、イメージ、内容についての説明（提示）を行ない、動きながら種々なとらえ方を探り一まとまりのフレーズにする。その間に動き、リズム、空間についての助言をしている。この過程では、児童自身でイメージを即興的に動きにおきかえ、イメージと動きとの結合は非常に密接であるが、リズム、空間の変化は動きそのものの変化に終り意図的な変化はみられない。過程Ⅱにおいて、Tのフレーズについての説明（提示）により、過程Ⅰでの即興的な動きを変化、発展させ2～3フレーズを連続しており、それにより動きは詳しくなり、有効な変化がみられる。さらに表現を深めるために、Pから発問により、リズム、空間の要因を引き出し説明（確認）を行なっているが、リズム、空間の変化にのみとらわれ、前に発展させた動きが逆に生かされず、表現が弱くなっている。

小学校5年では、教授・学習のパターンは2年と同様であるが、過程Ⅰにおいて、Tはさらにとらえ方の範囲を広げるために、イメージ、内容についての説明（事例）を行ない、それに対し、Pはとらえ方がより詳しくテーマの特徴や特性をとらえるようになり動きも変化、発展している。過程Ⅱにおいて、動き、リズム、空間、長さについての説明（提示）に対しては動きの有効な変化がみられるが、リズム、空間、長さについては変化しているが有効でない。そこで、再度、それらの要因について説明（事例）を行なっているが、変化、修正はみられない。最後の処理（反復）に対しては、動き、リズムについては有効な変化、発展がみられたが、空間については有効な変化がみられない。

中学校2年では、過程Ⅰにおいて、Tは各要因についての説明（提示）を行ない、イメージを出す→サブ・テーマを決める→内容構成→動きの探索、という順に進め、その間にテーマ、イメージ、内容、動き、リズム、空間についての助言を行なった。Pはイメージを出す→内容構成までに時間をかけ表現内容を練っている。動きの探索の過程では断片的な動きであるため、リズム、空間の助言に対し有効な変化はみられない。過程Ⅱにおいては、動き、リズム、空間、フレーズ、長さ、伴奏音楽についての説明（提示）を行ない、期間をおいて作品に仕上げさせた。作品においては動きは大変多様であり、リズム、空間の変化も多く、そのため作品の長さが非常に長く、各要因を意図して工夫してはいるが、テーマ、内容との

結合が弱く要因の配列にとどまっている。過程Ⅲにおいては、過程Ⅱにおける作品の評価の結果から、空間、長さ、伴奏音楽についての説明（提示）を行ない作品の修正をさせたが、意図して工夫のみられた要因はリズム、長さ、伴奏音楽であり、助言を与えてもなお工夫のみられなかった要因は空間の要因である。

高校2年では教授・学習のパターンは中学2年と同様であるが、過程Ⅰにおける動きの探索の過程では、テーマの感じを即興的に一流れのフレーズにして動き、動き、リズム、空間についての助言に対し、内容に適した動きの工夫をするというよりも、規格化された動きでまとめ、リズム、空間の変化も乏しい。過程Ⅱにおいては、リズム、空間、長さ、伴奏音楽についての説明（提示）に対し、作品は動き、リズムの工夫はみられるが空間、長さ、伴奏音楽については内容との結合がみられない。過程Ⅲにおいては、過程Ⅱにおける作品の評価から、空間、伴奏音楽についての説明（提示）を行ない作品の修正をさせたが、助言に対し有効な変化がみられたのは動き、リズム、長さであり、内容との結合が弱かったのは空間、伴奏音楽である。

大学2年では教授・学習のパターンは中学、高校と同様であるが、過程Ⅰにおける動きの探索の過程では、断片的な動きの連続ではあるが、動きの多様化と同時に統一化がみられ、リズム、空間を意図して表現を深めている。過程Ⅱにおいては、リズム、空間、長さ、伴奏音楽についての説明（提示）に対し、作品には動き、リズム、伴奏音楽と内容との結合がみられ、空間と内容との結合はみられない。過程Ⅲにおいては、過程Ⅱにおける作品の評価から、空間、長さについての説明（提示）に対し、修正した作品は内容と動きとの結合はより密接になり、要因間の結合がみられ、まとまりのある作品構成になっている。

〔2〕 各要因についての年令別考察

(1) テーマのとらえ方

3 才……「ちょう」の動きの特徴をとらえる。(例) とまる、とぶ、遊ぶ。

5 才……「ちょう」の動きの特徴をやや詳しくとらえる。(例) 花のまわりをとぶ、羽を下におろしてとまる。

小2年……「ちょう」の特徴や状態をとらえる。(例) 卵をうむ、台風にふきとばされる、幼虫からさなぎになる。

小5年……「ちょう」の特徴や特性をとらえる。(例) 羽をけがしてとべなくなる、葉の裏に卵をうみ、さなぎになりちょうになる。

中2年……他のものによって変化するようすやテーマから受ける感じをとらえる。
(例) ちょうの夢、成長の過程。

高2年……テーマに託した主観やテーマから受ける感じを感情的にとらえる。
(例) ちょうの苦しみ、喜び、短い生命。

大2年……テーマそのものから離れた連想やテーマに対する感情を象徴的にとらえる。
(例) 平安の都の栄枯盛衰、蝶の幻想的な世界。

(2) 動き

3 才……動きの種類は非常に少なく限られている。跳躍がもっとも多く、そのほとんどは腕上下しながらスキップで、次に走(小走り)が多く、はう、腕の屈伸、歩がわずかにみられる。

5 才……3才同様、種類が非常に少ない。走がもっとも多く、そのほとんどは腕上下しながら小走りで、次に屈伸(手首の屈伸)、歩(ウォークのみ)が多く、3才に比

べて跳躍が非常に少ない。

小2年……種類数、頻数ともに非常に多い。走、歩が多くそのほとんどは腕上下しながら小走り、ウォークのみで、次に屈伸（体前屈、手首の屈伸）であり、伏臥、回転、腕の上下振動、跳躍がわずかにみられる。

小5年……2年に比べ種類数、頻数ともに少ない。走、跳躍が多く、そのほとんどは腕上下しながら小走り、腕上下でギャロップで、次に腕の上下振動、歩、屈伸であり、腕波動、腕回旋もわずかにみられ、全体的に腕の動きが多い。




中2年……種類数が年令を通じてもっとも多い。頻数では振動、歩、回転、屈伸が多く、個々の動きでみると腕振動がもっとも多く、腕屈伸、腕波動など腕の動きが多い。回転と他の動きとの組み合わせの種類が多く、ピルエットターン、つま先ターン、リープターンをしてはウォーク、膝屈伸、などと多様である。ウォークとジャンプ、追歩とバランスなどのように歩と他の動きとの組み合わせも多くみられる。



高2年……個々の動きの頻数は少なく、その中では屈伸、歩、振動が多い。歩と他の動きとの組み合わせの種類が多く、中でもフォローとバランス、腕上下などのようにフォローとの組み合わせが多くみられる。中2年まではほとんど出現しなかった捻転がわずかにみられる。





大2年……個々の動きの種類数は非常に多く、頻数は非常に少ない。ウォークと体前後屈伸、フォローとバランスなどのように、歩と他の動きとの組み合わせ、回転、走と他の動きとの組み合わせの種類が多くみられる。全体的には体の前後屈伸、捻転、回旋、蛇動など身体全体を使った動きが多くみられる。






(3) 動きのリズム





動きのリズム分類は第22回日本体育学会において西谷怜子発表「リズム反応テストにおける動きのリズムについて」の分類によるものである。




3 才……種類は10種しかなく非常に少ない。頻数は  の連続リズムが圧倒的に多く、次に  の連続リズム、 より短いリズムの連続で単一なリズムのくり返しである。

5 才……種類は少ない。頻数は  の連続リズムが圧倒的に多く、次に  の連続リズムで、3才と同様、単一なリズムのくり返しである。

小2年……種類数、頻数とも非常に多い。中でも  より短いリズムの連続、 の連続リズムが頻数が多い。種類数が多いのは  と  より短いリズムの組み合わせである。

小5年……頻数が多いのは  の連続リズム、 より短いリズムであり、種類数が多いのは  と  のリズムの組み合わせ、 より短いリズムの連続である。

中2年……種類数、頻数ともに多い。中でも  より長いリズム、 の連続リズムが頻数が多く、種類数が多いのは  と  より長いリズムの組み合わせである。

高2年……全体的に頻数は少ない。その中では  より長いリズムが頻数が多く、 と  よ

り長いリズムの組み合わせは種類数、頻数ともに多い。

大2年……個々のリズムの頻数は非常に少ないが種類数は多い。シンコーペーションのリズムがかなりみられる。

(4) 空間構成

(イ) 高低の変化

3才では全く変化をしていない。5才では立ったりしゃがんだりの変化のみである。小2年では低い姿勢から始め、高、中、低位と交互に配列し頻繁な変動がみられる。小5年は中位（屈膝の高さ）→低位（立て膝）への変化が多い。中2年は頻繁に高、中、低の変化をし、最低位（床に伏す）はみられない。高2年はほとんどが低→中→高→中→低とまとまりはあるが型にはまった変化をしている。大2年は高2年と同様にまとまりのある構成であるが低位、最低位はみられない。

(ロ) 面の变化

3才、5才は前面向きのみで変化は全くみられない。小2年および5年は前面と側面が多く、背面はあまりみられない。中2年は前面と斜面が多く側面、背面はあまりみられない。高2年、大2年は斜面、側面、背面が交互にくり返され、前面は少ない。

(ハ) 移動の仕方および踊跡

3才、5才は空間を大きく円型にまわる移動で方向の変化は全くみられない。小2年は円型の移動とその場での方向変化の反復である。小5年は空間を小さく左右方向への移動とその場での方向変化の直線的な左右相称の踊跡である。中2年は直線、曲線を多様に配列し、空間を大きく網の目状に移動しており、動き始めと終止の位置が同一点である。高2年は移動の変化はあまりなく、その場での動きが多く、空間を小さく使った左右相称型の踊跡である。大2年はその場、直線、曲線を配列し変化があり統一のある移動である。

(5) 構成

3才は1種の動きのみ、5才は2種の動きの連続である。小2年は1フレーズの中に起伏のある2～3フレーズの連続であり、小5年は3～4フレーズの連続である。中2年は6～8フレーズの連続で、反復、類似のフレーズが多く変化に富んだ構成であるが、やや統一がみられない。高2年は4～6フレーズでまとめ、反復のフレーズを交互に配列し、統一はあるがやや変化に乏しい。大2年は4～7フレーズで変化と統一の流れがあり、起伏のある構成である。

(6) 作品の長さ

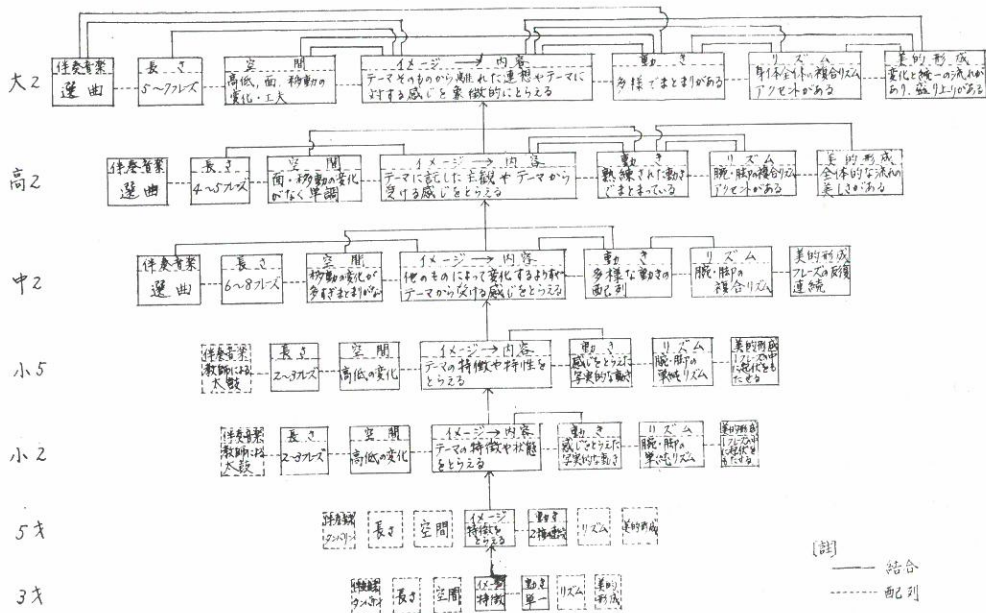
3才…16～25秒、5才…12～40秒、小2年…1分8秒～1分37秒、小5年…43～55秒、中2年…3分7秒～3分46秒、高2年…1分52秒～2分50秒、大2年…1分30秒～1分46秒。

(7) 伴奏音楽

3才、5才は教師によるタンバリン、小2年、5年は教師による太鼓のリズムを与えた。中学生以上は自由選択をさせた結果、中2年は表現用の曲を使い、高2年は映画音楽、大2年は電子音楽、現代音楽を使っている。

以上各要因について年令別に考察したが、それらをまとめ図式化したものが図2である。

図2. 要因の配列・結合の様相



4. ま と め

- (1) 幼児の段階では自分でテーマ、内容の選択はできず、教師の発問、説明に方向づけられ、動きの要因のみ変化、発展がみられる。
- (2) 小学生は自分のイメージを即興的に動きに移す段階であり、その過程においては種々の動きの工夫がみられたが、各要因についての助言に対し、工夫された動きの活用がみられず、要因間の結合は粗雑である。
- (3) 中学生は多様な動きの配列に終始し、リズム、空間の変化も多様である。助言により動き、リズムは統一され表現内容との結合が強まったが、空間の要因は内容、動きとの結合が弱い。
- (4) 高校生は動きが制御され変化に乏しく、空間の変化も乏しい。助言により動きの変化、発展がみられ、テーマ、内容との結合が強まったが、空間との結合は弱い。
- (5) 大学生は各要因について総合的な工夫がみられ、助言によりテーマ、内容が変化し、これらと動き、リズム、空間の要因との結合がさらに強まり、結合から統合への発展がみられる。

以上の結果を文部省学習指導要領に示されている指導内容と比較考察する。幼児の段階では幼児自身でテーマ→イメージ→動きへと発展させることはできず、教師の発言に左右され表現が形成されると考えられる。幼稚園教育要領における自由表現のねらいは漠然としているが、この時期には動きを導き出すことに重点をおいた助言が適切なのではなかろうか。小学校2年では、指導要領においては単に動きの模倣にとどまっているが、実態からは、題材の特徴をとらえた動きをフレーズに発展させており、指導要領では5年からフレーズが示されているが、この時期からそれが得られた。小学校5年では、指導要領に示されているように、力の起伏のあるひと流れのフレーズにして動き、この点においては一致している。また実態では空間

(面, 移動の仕方)を意図していても有効にできないことから、指導要領にも示されていないが、やはり面, 移動の仕方の工夫は、この時期ではまだ難しいと思われる。中学2年においては各要因の多様な配列に終る傾向から、指導要領に示されているように、まとめ方の指導について、動き、リズム、空間の変化と統一の流れに重点をおいていることは適切と思われる。高校2年においては、指導要領に示されているように、すべての要因について意図した作品構成であり、多様と統一の調和はあるが、反面、動きの制御化の傾向がみられた。このことは今後究明すべき問題として残される。このように中学生以上になると教師の助言を取捨選択して、自己変革し最適な表現へと深化させていく段階であり、すべての要因にわたって助言を行なうよりも、ポイントをついた的確な助言が必要であろう。

以上のことから、仮説一検証の立場からの限られた題材による実験結果ではあるが、創作過程における教授・学習のシステムならびに要因間の特性、配列、結合の年令別傾向が得られ、要因の重みづけ、すなわち創作ダンス指導の体系化へ接近する一応の手がかりになるとと思われる。今後はさらに深く研究を進め、年令に応じた系統的な指導法を打ち出したいと考える。なお、この論文は第23回日本体育学会発表の結果をさらに詳しく考察したものである。

参 考 文 献

- 波多野完治編 授業の科学第7巻 授業分析の方法 130頁
日本体育学会編 日本体育学会第22回大会号 391頁 昭和46年10月
日本体育学会編 日本体育学会第23回大会号 393頁 昭和47年10月
幼稚園教育要領 12～14頁 昭和39年3月
小学校指導書体育編 文部省 79～85頁, 180～183頁 昭和44年5月
中学校指導書保健体育編 文部省 126～139頁 昭和45年5月
高等学校学習指導要領解説 文部省 111～117頁 昭和47年